

研究課題	情報発信を要とした誰にとっても居心地のよい学校づくりを目指して
副題	～情報共有ツールを活用した他者意識と合理的配慮の充実～
キーワード	デジタルサイネージ 視覚支援 UD SDG s
学校/団体名	公立北見市立美山小学校
所在地	〒090-0068 北海道北見市美山町南9丁目36-8
ホームページ	https://kitamimiyama-sho.blogspot.com/

1. 研究の背景

革新と研究の基盤

2年前、**心理的安全性のある学校づくり**が求められている中で本研究がスタートした。学校の心理的安全性の構築は、管理職が学校の課題を的確に把握し、耕し、種を撒いていかなければならない。そのために管理職は具体的なビジョンを示しながら、“やりたい”を“できる”にする過程を示していくことが本校の革新に必要な手立てであるとした。

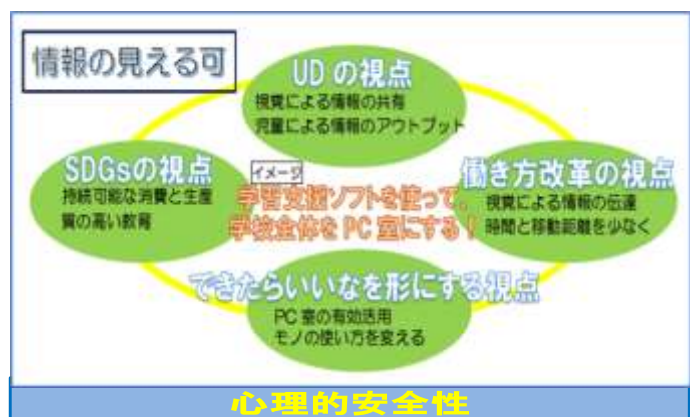
ソフト面（児童の実態と指導の課題）

本校には令和4年から難聴学級が設置されている一方、通常学級には右耳難聴、右感音難聴と診断を受けている児童がいるほか、“聞こえにくさ”を感じている児童が複数名みられた。また、特別支援学級及び通級指導教室に在籍している児童は全体の約13%、通常学級で特別な支援を必要としている児童は全体の約10%を占めているという実態も踏まえ、一斉指導や個に応じた指導の在り方についての改善が急務であった。職員からは“一斉指導の通りにくさ”が課題として挙げられており、双方が安心して学び合える環境を整えるためには、すべての児童・職員が必要な情報を共有し、見通しをもって主体的に行動できるようにするための視覚的な仕掛けが必要であると考えた。

ハード面（環境面における課題）

本校は、全校児童400人ほどの規模であり、築42年の校舎には長い廊下があることから、事故や怪我防止のために児童会による廊下歩行の呼びかけが通年行われていた。また、GIGAスクール構想による一人1台端末の導入により、PC室のタブレットやモニター等が手つかずのままとなっており、タブレットやモニター及びPC室の有効活用が望まれていた。

以上のことから、校内の壁面にPC室で使わなくなっていたモニターとタブレットを張り巡らしてデジタルサイネージとし、PC室で完結していた学習支援ソフトを校内のネットワークにつなぎ直して毎日職員室から全児童、全職員に向けて情報を発信することとした。この視覚支援の充実を美山小学校の特色ある取組とし、“環境を耕すこと”から本研究が始まった。



2. 研究の目的

本研究では、以下の3点についての変容を児童、教職員、外部関係者（学校運営協議会等）から明らかにしていく。

個々の力 “視覚的支援を柱とした合理的配慮”

発達の段階に大きな差がある小学校だからこそ文字だけで情報を発信するのではなく、イラストや色を使い分けることでデジタルサイネージはUDとなる。特に緊急時は、誰一人取り残すことなく正しい情報を受信させる。また、意図的な発信を行うことで、“情報を見る”ことから“見通しをもつ”ことへと進化させ、学校生活に生かせるようにする。

- ・校内の視覚的支援をベースに、各学級内の実態にあった視覚的支援を構築し、それぞれが必要な情報を選択しながら安心して学び、伝え合える合理的配慮の充実。
- ・視覚的支援を取り入れた指導の充実。

心理的安全性

その日に必要な情報のほかに、良さや頑張りの発信、生徒指導にかかわる内容をプラスの表現に置き換えて発信等を行うことで、情報を前向きに受け止めようとする素地を育む。また、学校生活に関連したクイズや雑学、写真等による行事の振り返り等の配信が学校生活に潤いを与え、受信した情報をもとに伝え合いや対話を充実させる。

- ・情報の獲得による安心感の向上。
- ・未然防止の指導の充実。
- ・よさや頑張りの気付きと認め合いの活性化。

情報活用能力

個別最適な取組としての一人一台端末を活用したデジタルポスターの取組から、子どもたちの情報発信力を高める。発信する前に“画面の向こうの相手への意識すること”を検証の視点の一つとし、情報モラルを身に付けさせていく。

- ・積極的な情報の視覚化。
- ・学んだことを生かし、自己肯定感を高めることによる表現意欲の向上。
- ・適切な表現方法の習得（情報教育）

また、学校の課題を“目標”に切り替え、耕した環境に対し具体的な活用方法を示すという“種”を撒いた。以下に示す「研究の経過」には、学校の研究が外部の目に触れる機会を積極的に生かし、「いいね」という“肥料”をもらいながら、本研究を他校に広めていくことも目指した。

3. 研究の経過

[通年] 校内のデジタルサイネージによる情報の発信と共有。

時期	取組内容	評価
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・前日準備で6年生に向け配信 ・入学式や参観日で保護者向けに配信 ・地震から火災の避難訓練時の活用 ・研究内容にかかわる校内研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・最上級生としての姿 ・<u>保護者の動きと反応</u> ・児童の動きと振り返り

5月	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会で取組の紹介 緊急時一斉下校訓練時の活用 	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の反応 職員と児童の動き
6月	<ul style="list-style-type: none"> 行事を支える職員の姿の配信 運動会までの児童の姿と当日の児童の姿の配信 北見市指導力向上研修会時の配信 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の反応とその後の動き 児童の反応 来校者の反応
7月	<ul style="list-style-type: none"> スクールフォトレポート① 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> デジタルポスターの配信 	<ul style="list-style-type: none"> 発信者の技能と児童の反応
9月	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練での活用 遠足、宿泊研修、修学旅行の様子の交流 学校運営協議会での報告 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の様子と振り返り 前期学校評価 学校運営協議会からの助言
10月	<ul style="list-style-type: none"> 行事を支える職員の姿の配信 学習発表会までの児童の姿と当日の児童の姿の配信 学習発表会時の活用 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の反応とその後の動き 児童の反応 保護者の動きと反応
11月	<ul style="list-style-type: none"> オホーツク管内学校体育研究会時の配信 	<ul style="list-style-type: none"> 来校者の反応
12月	<ul style="list-style-type: none"> スクールフォトレポート② 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> 中間報告会 中間モニターの活用にかかわる校内研修 	<ul style="list-style-type: none"> 後期学校評価
2月	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会での報告 スクールフォトレポート③ 	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会からの講評
3月	<ul style="list-style-type: none"> デジタルポスターの配信 研究成果報告 	<ul style="list-style-type: none"> 発信者の技能と児童の反応

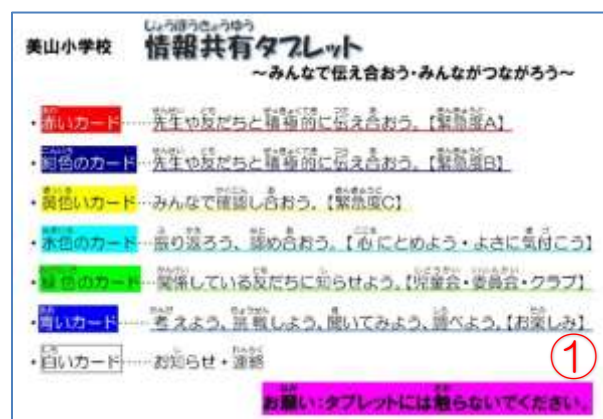
4. 代表的な実践

(1) デジタルサイネージ～日常遣いで見通しをもたせ、緊急時はUDとして伝え合う～

デジタルサイネージからの情報は、すべての児童に容易に受信できる内容でなければならない。文章は問いかけたり、ポジティブに言い換えたり、声に出して読みやすいよう簡潔になるようにするほか、イラストを用いて内容をイメージしやすくしている。

①背景色を使い分ける

背景色にきまりを設け、緊急度の高いものは積極的に伝え合えるよう工夫した [図①]。特に、背景色に赤を用いるときは、熱中症警戒アラートが発令されたときや、避難訓練、不審者訓練時にも使用し、命を守る行動に移せるようにしている [写真 A]。緊急時はすぐに配信できるよう配信画面をデスクトップに貼り付け、職員に配信方法を共有した。



②活動に見通しをもたせる

新しい活動に不安を感じたり、何をしたいのかわからなかったりすることを解消するために、活動の前に前年度の様子をスライドショーで紹介したり、図や写真を使って説明をしたりした [写真 B]。また、学校内でのケガを防止するために、自分たちの行動について振り返るような画像を配信することで、主体的に学級内で話し合い、行動に結び付けようとしていた [写真 C]。

③見えないものも、見えるようにし。良さや頑張りを認め合う。

行事の様子や異学年の取組などをスライドショーで紹介した [写真 D]。特に、修学旅行や宿泊研修の様子を見た児童は、進級への期待を口にしていた。スライドショーによる紹介は、行事後の振り返り生かされていた。ほかに、教職員が研修をしている姿や行事の準備をしている姿、地域の活動の様子等、児童が普段目にする事のない場面も配信した [写真 E]。そのことにより、教職員のチームワークや当たり前にあると思っていたものが、たくさんの人に支えられてできていることに気づき、**視野を広げる**きっかけづくりとした。

④「配信したい！」のアクセラと“情報モラル”のブレーキ

授業で canva を使って成果物を作成する機会が増えると、児童には、全校に発信したいという意欲が高まった。前期の委員会にデジタルポスターの作成を依頼したところ、全校に呼びかけたい内容を盛り込んだデジタルポスターが集まった [写真 F]。



最初は、推しのキャラクターを使ったり、一部にしか伝わらないキャッチコピーを使ったりしたものが散見されたため、そこに携わる教職員が児童に向け、『著作権』、『発信者としての責任』、『情報リテラシー』の3つの観点で**制作物を客観視**し、発信前に立ち止まる機会を設けた。

(2) ハード面の充実から派生した情報発信

①児童による発信

今年度は、ICT を活用した児童会や委員会からの発信が急激に増えた。**個別最適な視点**で取り組みやすくなったデジタルポスターの作成は、委員会の活動内容に定着している。お昼の放送では、児童会が映像で発信する機会も増え、放送委員会からは音声だけでなく、映像を使ったクイズにも挑戦し、学校生活に潤いを与えている [写真 G]。

②共有・伝え合いをしやすく

PC 室で使わなくなっていたモニターを一人一台端末とつなぎ、中間モニターとして使いやすくした。教室内で自分の考えを共有したり、発表の練習に使ったりできるツールとして定着し始めた [写真 H]。



③オンライン学習の充実

今年度、本校の3年生の総合的な学習の時間では、これまでの学習のまとめの最終的な発表の場を、学校内だけにとどめず、知床ウトロ学校の3年生とオンラインでつなぎ、双方の地域の特色について交流した [写真 I]。この取組のもととなったのは、今年度、本校の6年生がキャリア教育の一環で天気予報士の赤羽祐介氏と行ったオンライン学習である [写真 J]。次年度は、本校の職員が日本人学校に滞在することとなったため、海外とつなぐオンライン学習も予定している。



5. 研究の成果

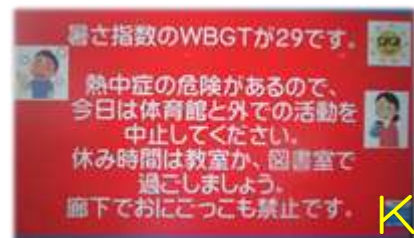
“受信した情報を伝え合う”。文字から言葉へ。SNS が発達した時代だからこそ、本校では言語と非言語によるコミュニケーション（対話）を重視している。日常的な情報の配信も授業中の発問や説明の際は視覚的な仕掛けとともに内容を簡潔にしていくことで、児童が主体的に考えたり、イメージしたりし、自らの行動に生かす姿が増えたことが大きな成果と言える。

(1) デジタルサイネージによる情報発信

①UD としての活用

夏季は、熱中症予防の配信が増えた。授業を終えた児童が休み時間になって教室を出た際、「今日は黄色だから気をつけよう」「赤だから外では遊べないね」と友達同士で声をかけ合う姿が見られた。配信画面の色をもとに児童が主体的に伝え合っていることから、緊急時における色を使った視覚支援が非常に有効であることが明らかになった [写真 K]。

また、デジタルサイネージは1階から3階までの各廊下に設置してあるため、児童が校内のどこで授業を行っていても情報を受信できていることから、校内の設置場所についても適切であることが分かった [図②]。



②緊急時の活用

火災による災害時では、出火場所と避難場所を正確に把握することで最も安全な避難経路を選択することができる。安全教育に基づき4月と9月の避難訓練では赤い背景色に出火場所と



避難場所を記し配信した。訓練後の振り返りで出火場所を問うと、2回とも90%を超える正答率が得られた。緊急時は音声による情報発信が通常ではあるが、**視覚支援を取り入れることで、全ての児童が、命を守る行動について考えることができる**ことが明らかになった。

また、今年度の6月には、このような避難訓練の取組をもとに、不審者訓練担当職員が不審者侵入時に、『特別なチャイムの合図と視覚支援を合わせた訓練の在り方』を確立した。

③日常の活用

学校評価における児童アンケートの「モニターの内容をもとに、友だちや先生と伝え合うことができた」という設問では、全体の82%の児童が「できた/まあまあできた」と回答している。また、「モニターの内容を自分に生かす（取り入れる）ことができた」という設問では、全体の88%の児童が「できた/まあまあできた」と回答している。以上のことから、日々のデジタルサイネージからの情報を受信することが、児童の学校生活で日常化していることが分かった [写真 L]。

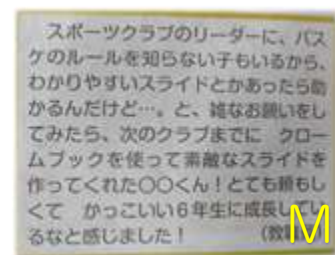


(2) 受信した情報を活かす

①日常の場面から見えた具体的な児童の姿～学校評価教職員アンケートより～

- ・「グラウンド使えるかな」とモニターを見て判断し、担任に知らせる児童がいた。
- ・行事写真を通して「高学年になったらこんなことをするんだね」と未来に期待を持つ児童の姿があった。
- ・友だちの感想や意見を紹介したスライドを見て、「私も同じ気持ち」と共感したり、「どうしてそう思ったの?」と質問したりする交流が生まれていた。
- ・登校するとまずデジタルサイネージを確認し、「今日はどんな写真があるかな」、「昨日の自分が写ってる!」といった声が聞かれた。
- ・見たことを友達と話題にしながら、「いい場面だね」「次は自分たちも出てみたい」と、活動への意欲が高まった。
- ・スライドをきっかけに、日々の出来事を自分ごととして振り返る力が育ち、友だちの頑張りを認め合う温かい関係が広がった。

また、現在作成中のPTA広報紙に『わが子を褒めてあげたい』というエピソードを会員から募集していた。教職員からのエピソードに、**児童が困っている児童に対し、効果的にICTを活用している姿**を称賛しているものがあつた [写真 M]。



以上のように、デジタルサイネージの活用から、「知る」「共感する」「次に生かす」という児童の学びの循環が生まれていた。児童が「自分で確認する」「自分で判断する」姿が多く見られたことも大きな成果であると言える。

②具体的な数値による変容と外部からの評価

安全な学校生活を呼びかける視点では、職員からは児童がデジタルサイネージから投げかけられた内容について主体的に考えたり、行動に移したりしている姿が見られているという報告を受けている。保健室の統計からはR7.2月末のけがによる児童の保健室来室者数は1688人、

R8.2 月末では 1487 人であったという具体的な数値の報告を受けた。

学校運営協議会の 2 月の講評では、「この 2 年で学校が大きく変わった」という評価をいただいた。学校のイノベーションに成功するためには、その学校の実態や課題を的確に把握したうえで進めてかなければならない。そのことが前向きな学校の変化へとつながるのだと確信した。実際、職員を対象に行ったストレスプロフィールにおける総合健康リスクは R6 が 74、R7 が 70 であり、この数値から、本校は非常に健康的な職場環境であるということを表しており、**心理的安全性のある環境**の中で職員が生き生きと教育活動に従事できているということを裏付けた学校運営協議会の評価だと受け止めている。

本研究では、学校の課題を学校の目標とし、**カリキュラム・マネジメントにおける『資源の活用・連携』**の側面を戦略的に進め、本校の特色ある教育活動として定着させることができた。本研究は、パナソニック教育財団はもちろん、北見市教育委員会・P T A・地域・企業の支えがあって成し得たものであることを忘れてはならない。この研究を通じて得たつながりこそが学校を進化させる最大の成果であるとともに、今後も学びと発信を止めず、学校の教育活動に生かしていきたい。

6. 今後の課題・展望

デジタルサイネージを活かした視点 ～展望～

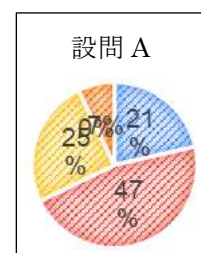
緊急時における視覚支援の充実は、本研究推進の背景にある課題の一つである。次年度は、今年度の成果を生かし、休み時間における避難訓練でどのような結果が得られるか検証していく。また、これまでの研究の成果を児童にも共有し、次は児童自身が情報を発信する側となって学校全体をリードする取組へ発展させていきたい。

授業内における中間モニター活用の視点 ～展望～

北見市では年間複数回、教育局や市教委、巡回指導や研修会のために授業を公開する機会がある。その際、積極的に児童が中間モニター等を使って情報を発信・活用している姿を参観してもらえるよう計画することで、事後研を通じて更なる活用方法への助言をいただく。

校内研究の視点 ～課題と展望～

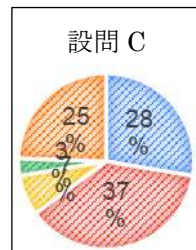
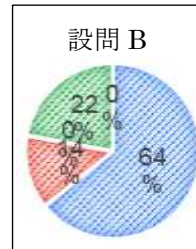
学校評価の職員アンケートでは、「児童に情報を発信する力（伝えたいという意欲も含む）はあると思う〔設問 A〕」という設問に対し、「そう思う」、「まあまあそう思う」と回答した職員は全体の 68%であった。この結果を受け、「更に児童の情報を発信する力（伝えたいという意欲も含む）を伸ばすためにはどのようなことが考えられるか」と質問したところ、「自分の考えをもてる、もとうとする児童でも、その考えをまとめて表出しようとするに苦手意識があるように感じる。そのため、語彙力の向上やアウトプットする機会を増やす」、「必要感をもたせる、伝えることへの自信を付けさせる、伝える技能を高める（応用力?）」、「学習の成果を発表する機会をたくさん経験させることで、読んでもらえる・聞いてもらえる→自分の取組を認めてもらえて嬉しい! →自信→次もやってみたい!につながるのではないか」といった具体的な方策が多数寄せられた。



以上のことを踏まえ、今年度の本校の校内研修では『自分に合った方法を選べる授業づくり』を重点に定め、「学び方」について検証してきた。次年度はこれまでの研修内容をもとに、「自分に合った表現方法」についても検証できるよう校内研修に落とし込んでいく。

対外的な視点 ～課題と展望～

後期の学校評価における保護者アンケートで「校内にたくさんのデジタルサイネージが設置されており、児童に向けて情報を発信している取組を知っている〔設問 B〕」という取組の周知に対する設問では、86%の保護者が「知っている/まあまあ知っている」という回答が得られた。しかし、「校内のデジタルサイネージが児童や来校者への情報発信に役立っていると思う〔設問 C〕」という設問に対して好意的な回答の65%に対し、25%が「わからない」という回答だった。そのため次年度は、情報発信の意図や児童が活用する姿についても発信していく必要がある。



具体的な方策としては、本研究で明らかになった成果を、これまでの取組とともに保護者や地域に発信するほか、学校関係者が集まる機会には、学校要覧に本校の特色ある取組とその成果を掲載するなどし、視覚支援の充実の必要性やそれにかかわるハードとソフトの両面への投資と整備が、持続的な発展と効率化への鍵となることを投げかけていきたい。

7. おわりに

令和の時代の幕開けは、学び方や学習環境が大きな変化をもたらすものだった。転んでもただでは起きない日本人の逞しさが、GIGA スクール構想を急速進展させたということは言うまでもない。学校現場では急激な変化への戸惑いながらも、今年度、パナソニック教育財団の助成によって、持続可能な社会の担い手の育成のために、日本各地の学校が切磋琢磨し合いながら日々の教育活動にあたっていることを改めて気付かされた。職員は目を輝かせながら先進校の取組を聞き入り、新たな可能性を見出そうとしていた姿が印象に残っている。

本校の実践は他校の実践に比べると極めて小さな一歩かもしれない。しかし、財団の皆様にはSDGs や合理的配慮の視点で推進する本校の研究に対し、多大なる支援をいただいたことへの感謝と誇りを胸に、今後も組織としての小さな一歩を確実に歩んでいきたい。

8. 参考文献

- ・ 公立三木町立白山小学校（2024）https://www.pef.or.jp/db/pdf/2024/2024_31.pdf
- ・ 愛媛県立西条農業高等学校（2022）https://www.pef.or.jp/db/pdf/2022/2022_59.pdf
- ・ 郡山ザベリオ学園中学校（2020）https://www.pef.or.jp/database/pdf/2020/2020_30.pdf